

中山間地域における地域固有性に着目した芸術活動 ：《八女茶山おどり》制作プロセスの分析からみる コミュニケーション

森, 千鶴子
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

高, 詩関
株式会社ラックランド

佐々木, 奏
九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学コース

朝廣, 和夫
九州大学大学院芸術工学研究院

他

<https://doi.org/10.15017/5208224>

出版情報：芸術工学研究. 37, pp.1-15, 2022-11-01. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：

中山間地域における地域固有性に着目した芸術活動

《八女茶山おどり》制作プロセスの分析からみるコミュニケーション

Artistic Activities Focusing on Regional Specificity in Mountainous Areas

The Diversity of Communication in The Analysis of The Making Process of *The Yame Chayama Odori*

森千鶴子 ¹	高詩閔 ²	佐々木奏 ³	朝廣和夫 ⁴	長津結一郎 ¹
MORI Chizuko	KAO Shihmin	SASAKI Kana	ASAHIRO Kazuo	NAGATSU Yuichiro

Abstract

This case study aimed to clarify how art projects in mountainous areas focus on nature, history, culture, past livelihoods, and livelihoods unique to the site. The analysis of interviews and questionnaires using M-GTA shows that what people involved in the projects gain is an awareness of the importance of culture through local traditions and history. And that contacts are made between people from different backgrounds. The individuals involved in the project have gained a new way of perceiving the region. What was found through the life story research was that by shining a light on the local area, the artists helped to create a common ground and a common understanding among the participants. It was also found that the attitude of the artists to think, act and make independently stimulated their surroundings and led to a process of behavioral change.

1. 研究の背景

1.1. 里地里山をめぐる担い手不足の現状

里地里山に関して近年、集落共同体の弱体化や、災害による豊かな景観の崩壊が学術的および社会的課題となっている。コメの価格が低下し、農作業が機械化していることも手伝い、農村の後継者となる担い手が不足している。そのため耕作放棄地が増えているとともに、そこにあった農村の技術、さらには年中行事や農村文化が消失している現状にある。

里山保全の観点からは、棚田の営みがなされる効果は単に景観が創出されるだけでなく、水害や土砂災害から村を守るといった側面があった。これらの営みが減少するなか、現在の里山はたびたび水害に襲われて被害が増加する現状にある。このような課題に対応するには、担い手の不足に対応しなければならない。そのためには、単に後継者を育成するというだけでなく、風土に根差した棚田の保全・活用が求められる。その手法として近年着目されているのが、ツーリズムやボランティアなど、恒常的に農村に関わるのではない非農家との新たな共同体形成である。

このような里山の保全に着目した新たな共同体形成に関する取り組みは1980年代後半から行われている。重松¹⁾は、大阪市周辺の当時の里山について、「農用林としての機能を喪失し（中略）密生するままに放置され、また都市的土地利用に無秩序に転用されつつある」状況を指摘している。重松は、自発的な市民・行政・林地所有者の3者が相互補完的に協力し合う、新たな保全・管理システムの形成を提示したのだった。このことは、高まりつつある市民の自然志向を受け、二次林の保全・管理

連絡先：長津結一郎, nagatsu@design.kyushu-u.ac.jp

1 九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門
Department of Design Futures, Faculty of Design, Kyushu University

2 株式会社ラックランド
Luckland co.,ltd.

3 九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻コミュニケーションデザイン科学
コース
Communication Design Science Course, Department of Design, Graduate
School of Design, Kyushu University

4 九州大学大学院芸術工学研究院環境設計部門
Department of Environmental Design, Faculty of Design, Kyushu University

と余暇活動や健康づくりを兼ねていたとも言える。重松は1994年に大阪府立大学から九州芸術工科大学環境設計学科（現九州大学大学院芸術工学研究院）に赴任し、主に福岡県八女市黒木町において里山・田園保全ボランティア活動や教育・研究を展開した。2004年には本論の活動地である黒木町笠原にある笠原東小学校が休校となり、地元と協力し里山保全活動の場所としての活用を構想し、2007年には「笠原東交流センター（以下、愛称である「えがおの森」と称する）」としてオープンした。しかしながら、少子高齢化の進む地域では担い手不足もあり地元主体のプログラム企画・運営が困難であることが課題とされ、2007～2008年には地元住民、地域外参加者、そして専門家による地域資源を探索するワークショップを実施している²⁾。この取り組みは地元学³⁾⁴⁾の手法を参考としている。これは教育・研究に加え、活動プロセスにより集合知を形成・共有し、地元を含めた関係者の主体性、自律性、そして、創造性を発揮することを期待している。また、山村の小学校などの廃校活用は2000年ごろから地域活性化などを目的に各地で行われるようになり、多数の事例が報告されている。

このように農業・農村体験活動は全国的な広がりを見せているが、一方で、運営面の人材不足、運営者の経済的、労力的な負担から活動の持続性への課題が指摘されている。唐崎ら⁶⁾は、この持続性について参加モチベーションの維持と、その誘因となるインセンティブの創出に着目している。農業・農村体験活動は、主に来訪者による農業への関心、交流、レクリエーションといった個人的・利己的モチベーションや、運営者による教育、啓蒙、地域振興などの公益的・利他的モチベーションに支えられ運営が成立する。しかしながら、運営に関わる労力負担の大きさ、高齢化、経営的インセンティブの欠如などが、モチベーション維持を阻害する要因となっており、協力者の参加を促進するには、報酬や交流機会といったインセンティブを設定し、相互に機能する活動設計の必要性を指摘している。

1.2. 文化政策研究からみる限界点

このような地域の状況に呼応するような形で、2000年代以降の都市と地方との交流人口の増加の手段として注目されたのが、芸術による地域づくりの潮流である。こうしたアートプロジェクト⁷⁾や芸術祭は全国各地で実施され「アートツーリズム」と称され、芸術に関心を持つ者だけでなく、里地里山を含む風光明媚な土地の魅力に惹かれた人々が地方を訪れる契機となった。西田⁸⁾は越

後妻有の《大地の芸術祭》と瀬戸内直島のベネッセアートサイトの現代アートを風景論から考察し、これらの取り組みは、中山間地域や島嶼の風土性を浮かびあがらせ、過去の生業や生活など場所の記憶を再認識させたとし、アートツーリズムは農の営みや里山の風景への関心を示すグリーンツーリズムやエコミュージアムと通底していると論じている。また、土地や人と強く結びついた作品は、地域固有の自然、歴史、そして文化が組み込まれることから、地域の潜在的価値の再発見や誇りの醸成につながるという指摘もある⁹⁾。

一方で、アート作品づくりで行われる住民の参加や共同、交流の意義、継続性について、勝村ら¹⁰⁾は越後妻有の大地の芸術祭における住民評価の研究において、住民の参加の度合いによって評価が異なると指摘している。上田・高橋¹¹⁾は、「アートが必ずしも万人に共感を与え、人々をまちづくりに引き込むほどの力を持っているわけではない」と述べ、「企画段階から参加者とともに検討を重ね、住民の納得のいく作品や風景を実現することで、アートをを用いて多様な立場の人が時間と空間を共有するきっかけを作るだけでなく、風景を通じたコミュニケーションによって地域全体への広がりが期待される」と指摘している。

また文化政策の観点からは、創造都市論から派生した「創造農村」という概念をめぐる議論がある。コミュニティが持つ豊かな創造活動に基づいて、ローカルな地域社会や、あるいはグローバルな環境問題の課題に対して、創造的問題解決を行える「創造の場」が生まれることが期待されている¹²⁾。だがその理論は個別事例を評価するための言説に留まっており、どのようにしたら創造農村が生まれ得るのかという議論は十分に成熟していない。

前述した里地里山をめぐる問題を含めて、農村に創造的問題解決を行える場を生み出すためには、創造的な担い手の存在が重要である。その担い手の関わりは必ずしも専業で農村で働く人に留まらず、「関係人口」¹³⁾と呼ばれるような、非農家による外部からの関わりも含めた柔軟な関係性の構築が必要である。その関係性の構築の手法について検討するうえでは、里山保全のためのワークショップについて唐崎ら¹⁴⁾が述べるように、1) 活動の初期段階において、協議会にみられるような多様な人材が新たに関係をもつ場の創出、2) 活動経験を通しての里地保全活動による価値の共有、3) 信頼に基づく関係者との関係性の構築が課題であるといえるだろう。

ではアートプロジェクトは中山間地域の課題に接近す

る形でどのように実現されているのだろうか。そしてそこに関わる人々にとってのインセンティブはどこにあるのだろうか。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中山間地域において風土性を活かしたアートプロジェクトがどのように行われ得るかを検証することである。風土性とはここでは、地域固有の自然、歴史、文化、過去の生業や生活など場所の記憶のことを指す。また、こうしたアートプロジェクトが実施されることで、唐崎らが指摘するような参加モチベーションの誘因となるインセンティブがどのように生まれ得るのかを状況整理することも目指す。

筆者らは 2015 年より断続的に福岡県八女市黒木町笠原を拠点として里山保全活動や国際ワークキャンプボランティアによる活動を支援してきた認定 NPO 法人山村塾と連携し、アートと農の関わり方について考え実践するプロジェクトを行ってきた。その成果は社会的にも認知されつつあり、全国メディアにプロジェクトの成果の一つであり、本論で後述する《八女茶山おどり》が取り上げられるという出来事も起こった。本論ではこれを事例研究として取り扱い、プロジェクトを運営する中で内包されていた合理性¹⁵⁾を質的研究を通じて明らかにする。そのことで、中山間地域におけるアートのあり方やその波及効果についてのモデルを構築するための足掛かりとなることを目指す。

3. 事例概要

3.1. プロジェクト全体の概略

八女市は、福岡県の南に位置し、北は福岡県久留米市、西は福岡県筑後市、南は熊本県、東は大分県に接している。人口が 62,132 人 (2020 年 7 月頃)、総面積が 482.44 km² (2017 年 10 月以来) であり、福岡県内二番目の広さである。市の中南部には平野が広がり、北東部は森林に占められている。和紙、仏壇などの伝統工芸や、八女茶、椎茸などの農作物が有名である。黒木町は昔、八女郡の一部であったが、2010 年に廃止され、立花町、星野村、矢部村と八女市に編入された (図 1)。

本研究の研究対象となる《八女茶山おどり》は、複数の経緯を経て展開された。主催団体、事業名などを表 1 に示す。

2018 年度から 2020 年度まで実施された「奥八女芸農プロジェクト」は、九州大学大学院芸術工学研究院附属



図 1 八女市旧黒木町の地図

表 1 奥八女芸農プロジェクトの概略

実施年月日	事業名	主催・共催	参加者構成
2018 年 8/24 ~ 9/20 計 28 日	奥八女芸農 ワークキャ ンプ	特例認定 NPO 法人山村塾・ SAL	アーティスト 1 名、 参加者 3 名 (香港 2 名、ロシア 1 名)
2019 年 8/22 ~ 10/10 計 50 日	奥八女芸農 ワークキャ ンプ	特例認定 NPO 法人山村塾・ SAL	アーティスト 1 名 一般参加者 4 名 (フ ランス 2 名、ベルギー 1 名、日本 1 名)
2019 年 10/5	《八女茶山 おどり》発表 会	特例認定 NPO 法人山村塾・ SAL	発表会参加者 25 名
2020 年	奥八女芸農 ワークキャ ンプ	認定 NPO 法 人山村塾・ SAL	アーティスト 1 名、 一般参加者 5 名
2021 年	奥八女芸農 ワークキャ ンプ	認定 NPO 法 人山村塾・ SAL	アーティスト 1 名、 一般参加者 1 名

ソーシャルアトラボ (以下、SAL) の「社会包摂に資する共創的芸術活動のデザインと人材育成プログラムの構築」事業の一環である。この事業は、文化庁の「大学における文化芸術推進事業」の支援を受けた*1。

このプロジェクトでは、2018 年にアーティストを公募し、SAL と山村塾が選定を行い、農村地域に暮らす人々の日常や土地の歴史から立ち上がる「民俗芸能」を創作するというプランを提案した演出家・民俗芸能アーカイバーの武田力 (1983 ~) を採用した。

3.2. 2019 年度奥八女芸農プロジェクトの実施内容

以下、《八女茶山おどり》が主に制作された 2019 年度に着目し、その活動内容を示す。2019 年度の奥八女芸農プロジェクトにおいては、人と人、自然と人がつながる持続的で豊かな暮らしを目指した取り組みが行われた。具体的には、山村塾が主体的に実施しているワークキャンプ・ボランティアプログラムと共同で実施する形で、

50日間の滞在が計画された。プログラムを構築するうえで特徴的な点は、芸術家が海外から来訪したワークショップ・ボランティアとともに滞在することと、芸術活動

と農作業を概ね半分ずつ行うようにスケジュールリングされたことである。プロジェクトの実施スケジュールを表2に示す。アーティストと参加者5名は、8月22日に滞

表2 2019年度奥八女芸農プロジェクトスケジュールと活動風景

日付	活動内容	活動写真	
8/22	集合		
8/23～24	オリエンテーション、プロジェクトの説明、レクチャーなど		
8/25～26	農作業・景観保全作業、森林管理	【農作業・景観保全作業】	畑の草刈り、ヤギの世話、小屋の清掃、イノシシ防止の電気柵の設置、農機の使用とメンテナンスなど
8/27	農作業・景観保全作業、森林管理		
8/28	【休み】		
8/29～31	奥八女芸農学校	【森林管理】	水路の修復作業
9/1	【休み】		
9/2	農作業・景観保全作業		
9/3	農作業・景観保全作業、アートワーク		
9/4	【休み】		
9/5	アートワーク		
9/6	農作業・景観保全作業		枝打ち、薪拾い、伐採の見学、林業のレクチャーなど
9/7	農作業・景観保全作業、アートワーク		
9/8	【休み】		
9/9	アートワーク		
9/10	農作業・景観保全作業、森林管理		
9/11	農作業、【休み】		
9/12	農作業・景観保全作業、アートワーク		地元施設との交流
9/13	農作業・景観保全作業、アートワーク		
9/14	森林管理		
9/15	【休み】		
9/16	アートワーク		
9/17～19	森林管理、アートワーク、アンケート調査 (九州大学緑地実習)		お茶の里記念館での見学
9/20	アートワーク		
9/21～22	【休み】		
9/23	彼岸花ツアー		
9/24	農作業・景観保全作業、森林管理		農家への訪問
9/25	農作業・景観保全作業、アートワーク		
9/26	アートワーク、【休み】		
9/27	農作業・景観保全作業、アートワーク		踊りの創作・練習
9/28	農作業・景観保全作業、アートワーク		
9/29	【休み】		
9/30	アートワーク		
10/1	願成就、地元向け発表会		
10/2	農作業・景観保全作業、【休み】		
10/3	アートワーク		
10/4	アートワーク、【休み】		《八女茶山おどり》の発表会 (公開)
10/5	発表会、アンケート調査		
10/6	【休み】		
10/7	農作業・景観保全作業		
10/8	農作業・景観保全作業、大掃除、アンケート調査		
10/9	振り返り		
10/10	解散		

在施設である「えがおの森」に集合し、10月10日までの50日間のプログラムは、主に農作業・景観保全作業、森林管理、そしてアートワークを組み合わせられて実施された。1日の時間配分は午前7時から11時まで、午後は13時から17時までが1コマとされた。午前と午後は農林作業やアート作業が入れ替わりで構成された。各作業の割合について、50日間で約100コマとなり、そのうち農作業・景観保全作業が23コマ、森林管理が8コマ、アートワークが23コマ、休みが23コマであった。これらの作業に加え、奥八女芸農学校、彼岸花ツアー、《八女茶山おどり》発表会などのプログラムの21コマ、願成就などの地元行事の2コマが行われた。農作業・景観保全作業の内容は、畑の草刈りとヤギ小屋の清掃作業、農体験のイノシシ防止の電気柵の設置、ラッキョウの手入れ、ヤギの世話、農機の使用とメンテナンス、そして、災害復旧に関わる水路の修復作業と道路清掃の手伝いが行われた。森林管理については、スギ・ヒノキ人工林の枝打ち作業、雑木や竹林の除伐作業、暖房用の薪拾いなどが行われた。

アートワークについて、前半は創作のために、笠原地域に所在する小規模多機能ホーム「よかよか」、お茶の里記念館、八女茶の生産農家を訪ね、施設の見学、八女茶の歴史や生産について学ぶ活動が行われた。後半は、農林地での作業、地元住民との交流、そして農村での共同生活で体験したことに基づき、アーティストと参加者が共同で八女茶山唄への振り付けの創作活動を行った。発表会の実施に向けては、宣伝のための地元FMラジオへの出演、手作りの看板の制作・設置、踊りの練習を重ね、10月5日に《八女茶山おどり》発表会を実施した。

3.3. 八女茶山唄と踊りについて

八女茶の起源地である八女地域に昔から歌い継がれてきた八女茶山唄が用いられた。茶摘みが手摘みで行われていた時代、毎年、茶葉を採る際には農家が地元や外部の人を招き、茶畑で作業をしながら八女茶山唄が歌われた。地域ごとに歌詞とリズムが異なり、作品として使われたのは笠原地域の八女茶山唄（表3）である。歌詞を表3に示す。

4. 研究の方法

本論で取り扱うデータは、《八女茶山おどり》の制作・展開にかかわる2019年から2022年にわたる参与観察を基にして、2019年度および2020年度に実施したアンケート調査、そして、2020年度、2022年度に実施した

表3 八女茶山唄 歌詞

作詞・作曲＝不詳
ハアヤーレー 縁がないなら 茶山にござれ (トコ サイサイ)
茶山茶どころ 縁どころ (アア 揉ましゃれ 揉ましゃれ トコーサイサイ)
ハアヤーレー 茶山戻りにゃ 皆嘗の笠 (トコ サイサイ)
どっちが姉やら 妹やら (アア 揉ましゃれ 揉ましゃれ トコーサイサイ)
ハアヤーレー お茶を飲むたび わしゃ思い出す (トコ サイサイ)
茶山で結んだ 縁じゃもの (アア 揉ましゃれ 揉ましゃれ トコーサイサイ)
ハアヤーレー 茶摘みやしまゆる じよもんさんな帰る (トコ サイサイ)
あとに残るは てぼ円座 (アア 揉ましゃれ 揉ましゃれ トコーサイサイ)
ハアヤーレー 今年やこれきり また来年の (トコ サイサイ)
八十八夜の お茶で会おう (アア 揉ましゃれ 揉ましゃれ トコーサイサイ)

半構造化インタビュー調査を行ったデータから構成されている。

参与観察では、筆者らが実際に活動に関わりながら、その経緯の記録を実施した。アンケート調査は、表1に示した2019年10月5日に実施した《八女茶山おどり》発表会(N=25)と、2019~2020年度にそれぞれ実施された奥八女半農半アートワークキャンプ(2019:N=5、2020:N=5)を対象とした。インタビュー調査は、山村塾職員とアーティスト、さらには制作に関連した地域の関係者を対象に実施した。初回は、プロジェクト全体の効果を探ることを目的とし、2020年度に第二著者が一人あたり50分程度の半構造化インタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach、以下M-GTAとする)を用い、アートプロジェクトの成果について、「参加者がどのような学びができたか」、「農とアートについての関係者の意識変化」など、について定性的分析を行った。2回目は、1回目の調査結果をもとにより詳細なプロセスを検討するためライフストーリー研究を活用し、2021~2022年度に

表4 奥八女芸農ワークキャンプ参加者へのアンケートについて

質問内容	若者が農村で行う作業について、本体験活動を通じ、活動前後で特に認識を深めたことについて、1つ選択してください (N=17)	
	選択肢	割合
	1. 農山村文化の継続	41.2%
	2. 農山村の過疎化問題の解決	11.8%
	3. 食育や木育などの環境教育の普及	29.4%
	4. 里山環境保全	0%
	5. 同じ志向の同士に出会える	11.8%
	6. 農林製品の販売促進	0%
	7. その他	5.9%
質問内容	若者が農村で行うアートワークについて、農村での本体験活動を通じ、活動前後で特に認識を深めたことについて、1つ選択してください (N=14)	
	選択肢	割合
	1. 日本の伝統と歴史の継承	50.0%
	2. 新しい創作が生まれる	28.6%
	3. 農林業が楽しいと感じられる	0%
	4. 日常生活のストレスから開放できる	14.3%
	5. その他	7.1%

第一、三著者が一人あたり 60 分～90 分程度の半構造化インタビューを行い、KJ 法を基にした質的分類を行った。

これ以降、5 章ではまずアンケート結果、続いて M-GTA を通じた分析結果を示し、そこから検討できる考察を論じる。続けて 6 章では、ライフストーリー研究を通じさらに分析し考察を論じる。7 章でこれらの考察を総合的に検討する形で結論を述べる。

5. 2019 年度～2020 年度調査に関する分析と考察

5.1. 奥八女芸農ワークキャンプ参加者へのアンケート調査結果

農作業とアートワークをアーティストや NPO 法人山村塾スタッフと生活を共に実施してきた一般参加者は、農作業とアートワークを通じてどのような認識にいたったのか、アンケート調査を実施した(表 4)。この設問は、農とアートの両方の活動の経験について、二つの要因を分けて、農作業の有益度、アート活動の有益度を尋ね、その違いを確認することを狙いとした。

対象は、2019 年度の 4 名と 2020 年度の 5 名、20 代の国内外の若者を対象としている。調査は活動の中間と、終わり頃に 2 回実施し、途中、帰宅し実施できない参加者もいたため、のべ合計は約 17 人とした。質問ごとに回答者数の N 値を示している。

まず、農村で行う作業について、最も認識があるとされたのは「農山村文化の継続」(41.2%)、次は「食育や

木育などの環境教育の普及」(29.4%) であった。次に、アートワークについては、「日本の伝統と歴史の継承」(50.0%) が最も多く、「新しい創作が生まれる」(28.6%) となった。

以上の結果は、アートワークキャンプに参加した若者たちは、農林作業およびアートワークにおいても伝統、歴史、文化について学び、その継承の重要性を最も認識していた。これは、農作業・景観保全作業、森林管理、アートワークのプログラムが農村文化の学びを深めたと言える。なお、半数以上が海外の参加者であったことの影響も想定され、来日の動機として、日本の農山村の伝統文化への興味があったであろう。

5.2. 2019 年度プロジェクト関係者へのインタビュー調査と M-GTA 分析

運営側のプロジェクトへの評価を知るためにインタビュー調査を行い M-GTA 分析を行った。調査対象の調査日は、主催者側である NPO 山村塾の 5 名のスタッフに 2019 年 12 月 23 日に対面で約 40～60 分、個別に実施した。アーティストの武田力に対しては 2020 年 10 月 10 日にオンラインで約 30 分実施した。質問内容は、①本プロジェクトの意味と目的、②参加者の変化、③主催者側として農とアートの繋がりに関する考え、④地域への影響、⑤本プロジェクトの経験と未来への展望などを中心に、語ってもらった。それぞれのストーリーラインを表 5 に示す。

表5 インタビューを通じて作成したストーリーライン

<p>【主催者としての山村塾のストーリーライン】</p> <p>奥八女芸農プロジェクトの目的は、地域に刺激を与え、新たな可能性を発見することであり、山村塾はこのような点に意義を見出している。2018年、2019年と2か年を振り返る中で、2019年のプロジェクトを2018年のプロジェクトと比較すると、地域とプロジェクトとの関連度、作品の完成度が高かったと評価できる。</p> <p>プロジェクトの成果として、これまでの奥八女芸農プロジェクトがもたらす影響は2つ指摘できる。1つ目は、農山村地域における農体験活動の意義として、地域問題に対する注意喚起と関心を高めることであり、地域の関与意欲をもたらすこと。2つ目は、地域にとっての奥八女芸農プロジェクトの意義として、異なる背景の人々の間に接点を作り、地域のプロジェクトへの関与度をもたらすことである。</p> <p>このプロジェクトから深められた学び・理解として、様々な活動を主催する山村塾の経験から、農とアートの繋がりは本質的な共通点があり、それを考える機会を作ることが山村塾の役目の一つであるとういことである。一方、プロジェクトの参加者は、農とアートの関係性について意識し、考えている人が少ないと感じられた。このようなプロジェクトの関わりを継続する必要があると考えられる。</p> <p>プロジェクトの全体評価として、2019年度の奥八女芸農プロジェクトの全体を振り返ると、農とアート活動のプログラムの連携が上手くいかなかったと指摘できる。本プロジェクトを通し、農の活動は単なる体験活動であったという問題があった。しかしながら、参加者は地域の記憶を共有し、コミュニケーションを取ることができ、かなり完成度の高い成果が得られた。</p>	<p>【アーティストのストーリーライン】</p> <p>本活動の背景として、今回の芸農プロジェクトの意義を語る前に、「アート」と「アートプロジェクト」の歴史から推察し、それぞれの定義を定める必要がある。近代化以前の日本では、農とアートは生活そのものであった。一方、近代化以後の日本では、アートは広域的に「芸術」を指している。そのような中、奥八女芸農プロジェクトは、一つの試みとして、過疎地域を改めて考えるきっかけづくりという位置づけであると言える。</p> <p>成果として、奥八女芸農プロジェクトは、地域アートプロジェクトの中における一つの試みであるというだけではなく、地域にとっての挑戦でもあった。地域における芸農プロジェクトの意味は、わざわざ考えるのではなく、今回のプロジェクトみたいな非日常の実体験を通し、個人の中にそれぞれの解釈が生まれることにある。一方、民俗芸能を理解していない人が多くいると実感された。そういう意味で、2019年度で創作した作品は、多くの人に民俗芸能を理解してもらおうきっかけになった。</p> <p>プロジェクトの評価について、振り返ってみて、プロジェクトを進めながら、当時の状況に応じプログラムを変更し、対処することを学習した。海外の参加者の視点を振り返ると、プロジェクト全体の文脈を考え直す必要がある。一方で、海外参加者との共同は作品の豊かさを得ることが期待できる。</p> <p>今後の展望として、個人的には芸農プロジェクトだけでなく、もし、これからやりたい企画があれば、自ら発足したい。今回、得られた成果から、大学の研究機構とNPO組織の増加は、アートプロジェクトの発展にとっては大事なことであったと考えられた。</p>
--	---

5.3. 小括

主催者側のNPO組織（山村塾）とアーティスト（武田力）への調査結果から見ると、共通に関心が寄せられている観点と、異なる立場があることが確認された。

まずプロジェクトの背景と目的についてNPO組織の視点から見ると、活動現場における観察が多く述べられており、過疎地域におけるアートプロジェクトの意義について、深く述べられていた。それに対し、アーティストの視点では、農とアートが連携するプロジェクトの意味は、論理的に歴史の側面から思考され、農山村における暮らしの実践から農とアートの関係性を連想していた。

続いてプロジェクトの成果についてNPO組織の視点から見ると、地域に与えた影響や変化について多く指摘がなされていた、農とアートに関する理解を深めるためには、時間をかけ、関わり続けることが大事であると強調された。一方、アーティストの考えから見ると、2019年度の奥八女芸農プロジェクトは、参加者と地域、両方にとっての挑戦となり、民俗芸能を通し、地域への理解を深めることが望まれていた。

最後に、プロジェクトの評価についてNPO組織の視点から見ると、参加者の状況を把握していたため、参加

者の学びや地域の変化について観察でき、プロジェクトの管理についてやプログラムのバランスに問題点があると指摘された。アーティストの視点から見ると、アートの創作は大きな影響を与えているため、NPO組織、大学、地域三者の間での連携を重視すべきであり、アートプロジェクトの発展には、このような枠組みを強化することが重要であると指摘された。

このことは、本論の目的として掲げた、中山間地域における里山保全活動の担い手育成の側面を考えた際に、アートプロジェクトが関与することで生まれるインセンティブをめぐる議論にどのように寄与するだろうか。

まず地域の担い手であるNPOの立場からは、地域課題に対する関心を集め、地域に対して関わってみようという意欲をもたらすことや、異なる背景の人々の間に接点を作ることが述べられた。またアーティストの立場からは、実際に身体を動かすような非日常的な体験を通し、個人の中に地域に対してそれぞれの解釈が生まれることが挙げられている。またアンケート調査からは、ワークキャンプの参加者にとって伝統や歴史、文化の重要性に触れる機会となることが挙げられた。これらのことを総合的に検討すると、担い手に対して奥八女芸農プロジェ

クトがもたらすものは、地域の伝統や歴史を通じて文化の重要性に気づき、異なる背景を持つ人々に接点をつくり、実際に身体を動かすことを通じて地域の新たな見方を個々人が獲得することにあるということが指摘できる。そのことで、アートを通じて農村文化への学びを深めることができるのである。

では、そのような体験機会は具体的にどのようなプロセスで構築されたのか。次章ではそのプロセスを追うことでさらに考察を行う。

6. 2021年度～2022年度調査に関する分析と考察

ここでは、主に2019年にはじまったソーシャルアートラボとNPO法人山村塾との協働による《八女茶山おどり》創作に関わった人々のインタビューから、プロセスに沿って分析を試みる。

具体的には、企画の立ち上げに参画していた4名のステークホルダーたちへのインタビューを実施した。主催者としてプロジェクトのコーディネートを全般を担った認定NPO法人山村塾代表理事の小森耕太、アーティストとしておどり制作に携わった演出家・民俗芸能アーカイバーの武田力、おどり制作のプロセスで高齢者への聞き取りを行った際に関与した小規模多機能ホーム「よかよか」（以下「よかよか」）^{*2}の佐藤良太、最終的におどりを披露する際に「八女茶山唄」を歌う民謡歌手で八女市観光大使の馬場美雅である。

以降、インタビューの言葉をもとにし「プロジェクトに対して事前に抱いていた期待」「地域住民への『聞き取り』『おどりを制作するプロセス』『おどりを通じて関係者に新たに芽生えたもの』『アーティストが農村に滞在する時間』『当事者以外へ広がりを持つ可能性』とカテゴリーインタビューの分析を行う。

6.1. プロジェクトに対して事前に抱いていた期待

小森は、これまで国際ワークキャンプボランティアを集めて里山保全活動を行ってきたが、今回のプロジェクトに抱く期待はそのプログラムの持つ限界にあったという。

2008年から80日間の長期合宿プログラムがスタートして、それなりに手応えはあったけど、日本人も外国人もボランティアで来ていて、「何したらいいですか？」っていう感じですよ。無理ないですけど、地域のルールも分からないし、その農作業とか山仕事する時の知識とか技術経験ないわけだから。あぁいい感じに

なってきたなっていう頃に、80日間終わる、みたいな。主体的な外部の存在があった方が、ボランティアのプロジェクトは面白くなるよね？ってずっと思ってたのを、じゃ、このアーティストの人がそれを担うっていうのはどうかなって思い出したんですよ。^{*3}

一方武田は、2008年より海外を転々としながら俳優として活動してきた。価値観も言葉も違う人々と演劇を通じて「見せて、見られるという演劇を、劇場でない場所で、俳優でなく演じ、自分自身がいろんな気づきを得ながら、それを見る人に還元する」という経験を繰り返す中で、「むしろその作業を今後は日本でやるべきだ。どのようにやるのかの手がかりを探して民俗芸能にアプローチした」と語る。

やはり民俗芸能は、その人たちのアイデンティティなので。主役だとか、今ここにいる人たちだけじゃなくて、先代から脈々と受け継がれたものなので。外の僕みたいな人間が結構深い、僕が教えるみたいなどころまで関わるということはかなりレアケースだと思います。で、《八女茶山おどり》に関してもここからの引用というか、ここから朽木古屋集落での経験をどう転用してみたいなことでやってるところがあるかなと思って。^{*4}

武田は、2018年の「奥八女芸農プロジェクト」から、八女市笠原地区に関わっている。この年のテーマは「現代に民俗芸能をつくる in 笠原」。参加者とフィールドワークを行い、チェーンソーを用いて杉を切り倒す動きなど、笠原地区で生きる人々の生活に息づく動きをもとに振付、試演を行った。続く2019年には、八女の伝統芸能に着目する作品づくりを提案する。

八女に来てからは、いろんな着想を得るのは、いつも飲み会だと思いますね。小森さんやいろんな地域の人たちと話すことができる飲み会っていうのは結構大事なんです。そこで結構アイデアを練ったりとかしてる感じですよ。^{*5}

飲み会で、民俗芸能の話になると、「八女といえば八女茶山唄」となる。時代とともに茶揉みが機械化され歌う機会がなくなりつつあることも語られた。その声を受けて、武田は「八女茶山唄に振りをつける」ということを

提案した。

地域の祭りが減少傾向にある中で、八女茶山唄が歌われていた日常を、どう取り戻すのか。民謡っていうだけではない形での入り口みたいな、広くみんなで共有できる形があるといいな、と。^{*6}

後日武田らは「よかよか」を訪問する。「よかよか」の佐藤は普段から来訪者を歓迎していると言い、次のように語った。

笠原の祭りで小森さんと出会ってから、いろいろ地域で一緒にできればという思いがありました。あと小森さんところが外国人の方も結構来られるってことで、そういう外国人の方との交流もしたかったので。(今回の話を持ちかけられて)自分としては抵抗がなくて。考えはあっても形になってなかったんで、すごく嬉しかったですね。

施設には、時折、子どもから大人まで慰問に来られますが、その年齢、年齢のエネルギーやパワーがあって、やっぱり与えるものが違うでしょうね。誰が来ても喜ばれます。(利用者さんは)ちょっと面白いんだろうなと思います。^{*7}

このように、それぞれ事前に抱いていた期待は異なっているが、中でも小森は、農村に来たのはいいが、なかなか主体的に動けないボランティアに対して、農村の風土性に着目し自ら考えて行動する存在として、アーティストを捉え、期待を寄せていたことがわかる。一方武田は、滋賀県高島市朽木古屋の「六斎念仏踊り」の継承の経験を八女でも活かそうとした。佐藤は以前から山村塾との交流を期待していたことからスムーズに交流に繋がったようだ。

6.2. 地域住民への「聞き取り」

関係者のプロジェクトへの期待がそれぞれ異なる中で、三者が話し合っただけの方法は「よかよか」での聞き取りを元に、おどりの振り付けを考えるとということだった。武田は、

「よかよか」に来られてる方は、だいたい80(歳代)後半とかですから、実際に茶揉み・茶摘みを手作業でやっていて、かつ八女茶山唄を歌っていたか、少なくとも作業とともに聞いていた最後の代だと思っただけです。

だから、彼らに話を聞くっていうのが一番いいかなって思ったっていうのと、どこの民俗芸能もそうですが、戦後っていうのは一つのターニングポイント。戦争が終わって高度経済成長期に入ると生活のあり方ががらっと変わる。だから多分、今の「よかよか」に通われてるような方たちが亡くなった後は、もう民俗芸能が成り立たない、彼らが持つて生活の知恵みたいなことは伝承されないことが多いのです。^{*8}

と述べる。茶山唄が歌われた日常を語るだけでなく、高度経済成長前の生活の知恵を語ることで、最後の世代である利用者に聞き取りをすることで、当時の茶業や日常の所作だけではなく、振り付けのための聞き取りで「伝承されないような生活の知恵」を聞くことを目指しているようだった。そして、その知恵こそが、「当時の日常の語り」の中にあるのだという。

(民俗芸能の)形・型を残すことはできても、その精神というかそこに紐付く日常性みたいなところをどう残すのか。(中略)例えば、六斎念仏なら六斎念仏踊りに内包されている様々なことから、これって本当はどうでもいいことでもあると思うんですけど、例えば、どういう人が昔いて、その人はこの踊りが得意で、この辺が素晴らしかったみたいな。ある意味どうでもいい話かもしれないけれど、そういうどうでも良さそうな話が結構大事だったりとか。直接的に言えば、その振りとかってというのは、その土地の生活と結びついているので。^{*9}

終戦や、高度経済成長という転換期で失われてしまった「日常」の中に、そこを生き抜いてきた人々の知恵や、民俗芸能を守り続けてきた精神がある。そして、民俗芸能に紐付く「振り」もまた土地の日常、暮らしと結びついているからこそ、かつての日常を知る人々に、話を聞くことを選んだと言える。

一方「よかよか」の佐藤は、「この入所者のほとんどが、お茶を作っていた人であったからこそ、プロジェクトとマッチした」とふりかえりながら、ある利用者を、聞き取りの家庭訪問先として武田に紹介したエピソードを語った。

その方は、認知症があるんで、行ったら毎日お茶(の袋)をくださるんですよ。それがどんどん溜まってくる

んです。だから袋いっぱい溜まったらこそ一っつとご家族さんに返そうと思って持っていったら、(家族に)もう「よかよか」で使ってください、と言われてたり。その方が、えらい喜ばれて、いろいろ話されて、やっぱり、お茶が自分の一番の自信作じゃないのかな？ *10

佐藤は、家族に相談してまで、武田にこの利用者を紹介している。その人のお茶へのこだわりの強さから、詳細な話を聞くことができるだろう、ということに加えて、その人が喜んで話すだろうということを予測し、ともに喜んで。「みんな、お茶を作っていたけど、いろんなお茶への考えが多分あったろうなあ」と、その利用者にとって茶業に従事していたことが、お茶の出来以上にいちばんの「自信」となっていたことを、佐藤自身も再確認している。

聞き取りにおいて、武田は、言葉だけではなく行動様式にも注目していたと佐藤は言う。

(お茶を)揉んでる感じとか、なんかこう、その方達が昔こうしてたであろう行動様式であったり、そういったところを武田さんがうまく引き出して振りにしてあったんでしょうね。だから振り付けができあがったときには、皆、自然に受け入れて、抵抗がなかったのかもしれない。自分が普段やってた動きが振りになってったからですね。 *11

このことについては小森も次のように語る。

お茶農家さんの話を聞いたりして、八女茶山唄の背景を理解するみたいな感じですね。武田さんの話には、おそらく八女茶山唄のことを地域のひとと話をしたり、その昔のお茶づくりの話をしてる時の農家さんの表情とか手の動きとか、すごい見てたんだと思います。人と人の出会いとか交流のことを歌った歌なので、その辺をやっぱ歌詞からだけでなく、昔の人達のそういう暮らしの中からは、そういうのを読み解いて、踊りができて。 *12

このように武田は、土地の日常、暮らしと結びついて、歴史の中で十分に伝承されないような生活の知恵に光を当てる取り組みを行っていたことがわかる。また、言葉だけでなく振る舞い、行動の様式を振り付けとして取り入れたことから、地域を知る者にとって自然に

受け入れることができるおどりをつくることにつながったのではないかと推察できる。

6.3. おどりを制作するプロセス

約1ヶ月の間、山村塾や、国際ワークキャンプのメンバーらと聞き取りを続けた結果、おどりには、茶山唄の歌詞や茶揉み作業の所作なども盛り込まれたものとなった。おどりは「よかよか」で、話を聞かせてくれた利用者や施設職員、山村塾のメンバーやワークキャンプの参加者に披露された。小森は、聞き取りを振り返り、こう語っている。

「よかよか」というデイサービスの利用者の人達と(山村塾の)ボランティアが交流することは今までもできたと思うんですけど、でも交流ってね、お茶飲んで話したら交流なのか？っていう。昔の話を聞かせてくださいっていうのも一方的じゃないですか？でも、アーティストの武田さんが明確な目標を持って、おじいちゃんおばあちゃん達と話をし、ボランティアの人が関わって、ある程度意図を理解しながらコミュニケーション取ることで、すごい積極的な関わりになるんですよ。そのおじいちゃん、おばあちゃん達も、ただ聞かれたこと喋ってるのではなくて、それが踊りとして一緒にアート作品を作る中に入ってるわけですよ。そこに今まで山村塾の手が届いてなかったところが見えた感じがしたんですよ。このキャンプの最後の方で、元小学校の跡地でみんなで踊ったりしたんですけど。武田さんとボランティアが主役ってわけじゃないですよ。 「よかよか」の人達がむしろ主役だったぐらいの感じで。 *13

武田は、地域の語り手こそが、民俗芸能アーカイバーだと語る。

今は「よかよか」っていうところをベースに生活されてるって感じの皆さんも、いろんな職業なり、生き方があったわけなので、民俗芸能の視点で考えると、彼らっていうのはもう僕以上に民俗芸能アーカイバー。僕なんか名乗っちゃいけないような感じなんですけど、だからこそ、彼らに学んでいく、なければならぬし、学んでいきたいなと僕は思ったので。 *14

このように、武田をはじめとするワークショップ参加者は、地域の住民に対して、民俗芸能アーカイバーであ

るという敬意を持って接していた。「あなたがここで生きてきた中での知恵や振る舞いが踊りに生かされるのです」という意図が伝えられ、住民がそれを受容することで、単なる昔ばなしではなく、茶山唄が歌われていた時代を生きた人々の具体的な話が語られた。参加者はこれらの物語や住民の振る舞いを、見逃すまい、聞き逃すまいと興味深く聞き、楽しいひとときを過ごしたのだという。「語らいの中から踊りをつくる」という共通の目標を携えていることで、より積極性の高い交流が生み出されているようだった。

6.4. おどりを通じて関係者に新たに芽生えたもの

佐藤は、これまでも、地域の人々のお茶に対するこだわりや、茶業に従事していた話はよく聞いていたが、プロジェクトを通じて改めて、地域の人々の「お茶への思い入れの強さ」を感じたという。「いろんな方のお茶への考え方やこだわりが見えた」と語り、「ケアとして関わる時には見えなかったその人の違う側面を見ることができた」という。

お茶の話もよく聞いていましたが、その話の中で（昔の知恵を）習おうと思って習えるものでもなく、どうやって教えてもらうかなかなか方向が難しいなど思っていたんですが、（聞き取りの中の）ふとした仕草やふとした言葉に、えー、そういうことだったんだ！って感じですよ。あ、こういう人かっていうところが見えてくると、ケアの方法も変わるしですね。^{*15}

一方小森は、2020年、コロナパンデミックの渦中で、《八女茶山おどり》のイベントを実行した時に感じた思いを語る。

そんな大々的には声かけしなかったけど、地域の人に何人か声をかけたら、みんな来てくれて、意外と楽しんでやってくれて、これはなんか継続できそうとか、しないといけないなっていう感じでした。今、茶業組合とか県茶連の人達も興味持ってくれて一緒にやれたら。歌と踊りとお茶を楽しむっていう、この3つを体験するっていうアートプログラムを、もう少し地域で何箇所かやっていきたいなって。子供達とか一般の人達にそういう場を提供したら、味わうのは、お茶の味だけじゃないと思うんですよ。この八女茶にたどり着いた背景とか、そこに携わってる農家の暮らしとか。環境とかそういう所も含めて、味わう

とか、楽しむっていうのが大事だと思うので。そういうのが《(八女)茶山おどり》のプロジェクトとしてできたらいいなあって思ってます。^{*16}

このようにプロジェクトが展開することによって、それまで接していた人の別の側面が見えることで接し方が変わったり、茶という文化の背景にある暮らしや生活に思いを馳せるきっかけとして機能していることがうかがえる。

6.5. アーティストが農村に滞在する時間

2019年の奥八女芸農プロジェクトの期間中は5章で詳述したように、アーティストの武田や国際ワークキャンプメンバーは、山村塾の拠点である笠原東交流センター「えがおの森」に滞在していた。

小森は、長期滞在によって、外部から来た参加者たちが、天候や一日の流れなど農的な時間を地域住民と共有し、参加者と地域住民の間に会話が生まれていたという。言葉だけの説明では伝わりづらかった山村塾の活動が、実際にワークキャンプメンバーやボランティアが農作業をすることで、地域に浸透していった。

海外のボランティアを含む色んな人たちが長期滞在するようになって、彼らは草刈りをしたり日頃の農作業をするんですよ、周りの農家の人たちと。雨降ったらのんびりしてるし、朝早く田んぼ行ってこう、ちょっと田んぼの水見たりとか、農家の人たちと同じ時間を外部の人が過ごすじゃないですか。それでだいぶ、この地域の人たちから、山村塾とかボランティアはなんぞみたいなのが染み渡った感じがして。

それがやっぱ印象的だったのは、それまではその僕と椿原さんと地域の人たちが話をするんですよ。僕は説明するんですけど、説明しても説明してもね、通じないことがいっぱいあって、理解してもらえないことたくさんあったんだけど、長期滞在のボランティアがここに来だすと、地域の人たちがボランティアに質問して、ボランティアが説明するようになったんですね。^{*17}

また、武田と佐藤の間に立って準備を進めていた小森は、武田が山村塾に滞在し、八女市笠原で暮らすことの意味について、地域住民との共通の土台や共通認識を持つことを挙げている。

例えば地域集落、農山村に入って行って、その地域の

米作りのことを全く知らないで、僕こういうウェブデザインとか得意なんで、この地域のお米がどうやったら売れるか一緒に考えましょうって言うてくる人を信用できるかって話ですよ。

でもその人が、うちの実家は農家で毎年おじいちゃんと一緒に田植えしてるんですよみたいな人だったら、多分話はできると思う。そういうやっぱ作法かもしれない、一種のね。相手と共通の土台ができていてこそ、何か作ろうっていう話になると思うので、武田さんとかが滞在してワークキャンプの人達と生活をともにするというところの意味合いもあるんじゃないかなと思います。

この土地の共通の認識をまず持つとか。未経験だったところは謙虚に学ぼうとするとか、相手を尊重して物事を進めるとか。何でもそうだと思いますけどね。^{*18}

一方で武田は、奥八女芸農プロジェクトのプログラムとは別に、笠原で暮らした時間や、山村塾や地域住民、そしてワークキャンプのメンバーと共に過ごしたことに意味があると考えていた。

農作業、聞き取りもするけど、作業もやって、笠原で暮らした時間、小森さんとか色んな方と過ごした時間っていうのが、聞き取りの時間と別にあると思う。(中略)基本的には海外から来たワークキャンプメンバーがいて、彼らと生活を共にしながら、アートの時間は半分で、農作業が半分、っていうことをやっていたので。草刈りそのものも、もちろん達成感とか気持ちいいっていうのはあるかもしれないけど、それ以上にワークキャンプメンバーと一緒にやるところに僕は意味があったから。^{*19}

また、アートワークの時間では、武田はアーティストとして、《八女茶山おどり》の創作やワークショップを実施する講師の立場であった。しかし、彼はワークキャンプメンバーを「一緒に生活する人」と捉え、農作業や生活を共にするために、意識的に振る舞っていたことが分かる。

彼らと農作業するし、アートの時間は僕がある意味先生みたいなので、そこにあんまり差をつけたくなかったですね。先生っていうちょっと1段上みたいな感じ。じゃなくて、一緒に生活する人みたいな。だからご飯

もちろん一緒に作ってたし、掃除もしていた。(中略)周りの人たちに掃除をしてる姿を見せるかというか多分それとそんなに変わらないと思います。^{*20}

このような経験を通じて小森は、アーティストが農村で創造的に生きることが、主体的に農村で暮らすことを提示することに寄与すると考えはじめたという。

(アートやアーティストに)期待するのは、創造的であることだと思うんですね。主体的に物事を進める力があると思うんですね、自分のアイデアとか、考えをね。それを前に出して、周りの人たちに伝えていくっていうところが長けていると思うので。^{*21}

このような発言からは次のようなことが読み取れる。アーティストやワークキャンプメンバーなど地域外から来た人々が、実際にその土地で暮らしながら農作業に従事することで、地域住民と外部からの参加者の間に共通の土台や共通認識が形成されていた。また、滞在期間中の農作業やアートワークのプログラムや共同生活を通して、アーティストは山村塾やワークキャンプメンバーと内部の関係性も構築しており、アーティストの、自ら考えて主体的に行動し、想像するという姿勢が、農村に住む人々や、ワークショップメンバーの刺激となって、行動に結びついていくことが期待されている。

6.6. 当事者以外へ広がりを持つ可能性

八女茶山唄の歌手として馬場美雅は、当時音響スタッフとして関わっていた山本隆文の声かけで、当プロジェクトに参加することになった。2019年以降、山村塾主催イベントの「唄って踊って味わう八女茶山」や八女商工会議所主催の「新茶まつり」など、八女茶山唄と《八女茶山おどり》を合わせて披露している。

馬場は、八女茶山唄の歌手として民謡や茶山唄の将来について、民謡が身近な存在でなくても、八女茶山唄は歌える人たちを作りたいと話す。

やっぱり高齢化になって(民謡の)大会もできないみたいな感じになっているので。民謡を別に習っているわけじゃないけど、茶山唄は歌えるっていう人を作りたいなと思って。(中略)別に民謡をやってるわけではないけど、茶山唄に興味がある人たちがちょっと練習してもらおうと色々広がるかなと思ってですね。^{*22}

武田の《八女茶山おどり》を創作する段階の思いと馬場の期待には、共通している部分が見られた。武田は、《八女茶山おどり》において、出会いや縁を主題とした場づくりを考えていた。

《八女茶山おどり》という、ある意味の祭りみたいなところで出会った人たちが、その後交流というかな、続けていけるような素地として、出会いみたいなところに重きを置いて作ってあるんですね。それは、八女茶山唄の歌詞からなんですけど、知らない人同士が出会って、その後も縁を昔ながらみんなでこの土地、違うところから来ていっしょの方もいるけれど、その辺を大事にしていこうみたいなもので。そういう日常にまた繋がって帰っていけばいいなっていうことを思っていましたね。^{*23}

このように、民俗芸能やその伝承に携わる立場からは、八女茶山唄の民謡だけではない入り口や、広くみんなで共有でき、一緒に踊った人たちの日常に繋がることを求めていることが分かる。

6.7. 小括

中山間地域においてどのような風土性、すなわち、地域固有の自然、歴史、文化、過去の生業や生活など場所の記憶に着目したアートプロジェクトが行われ得るのだろうか。ここまでのライフストーリーを統合し、上述したような本論の目的と照らし合わせると次のようなことが述べられるだろう。

今回のプロジェクトを通じてアーティストは、土地の日常、暮らしと結びついているが歴史の中で十分に伝承されないような生活の知恵に光を当てていた。また、今回の聞き取りの対象であった地域住民に対して「民俗芸能アーカイバー」、すなわち、生きていくなかでの知恵や振る舞いを自然と蓄積している存在であると捉えていたようだ。

またアーティストが訪問するだけでなく実際にその土地で暮らしながら農作業に従事することで、地域住民と外部からの参加者の間に共通の土台や共通認識が形成することに寄与していた。

具体的な踊りの制作プロセスにおいては、地域住民が過去の記憶を語る際の振る舞い、行動の様式を振り付けとして取り入れていた。その交流の様子が、地域の担い手にとっては、おどりを作る、という明確な目標を携えていることで、積極性の高い交流が生み出されているよ

うに見えていた。アーティストの、自ら考えて主体的に行動し、想像するという姿勢が、農村に住む人々や、ワークショップメンバーの刺激となって、行動に結びついていくプロセスが見てとれた。

その結果制作された踊りは、茶という文化の背景にある暮らしや生活に思いを馳せるきっかけとして機能するとともに、広くみんなで共有できる踊りになったことで、一緒に踊った人たちの日常に、農村文化やその背景にあるものが伝わっていく可能性をひらくものとなっている、と当事者のあいだに手応えを感じさせるものになっていた。

7. 結論

本研究の目的は、中山間地域において風土性を活かしたアートプロジェクトがどのように行われ得るかを検証することにあつた。また、こうしたアートプロジェクトが実施されることで、唐崎らが指摘するようなインセンティブがどのように生まれ得るのかを状況整理することも目指した。

中山間地域においてどのような風土性、すなわち、地域固有の自然、歴史、文化、過去の生業や生活など場所の記憶に着目したアートプロジェクトが行われ得るかという点について、事例を題材としたライフストーリー研究の手法を用いて検討した結果、次のようなことが浮かび上がった。アーティストが歴史の中で十分に伝承されないような生活の知恵に光を当て、実際にその土地で暮らしながら農作業に従事することで、地域住民と外部からの参加者の間に共通の土台や共通認識が形成することに寄与していたことがわかった。また具体的な踊りの制作プロセスにおいては、踊りを制作するという明確な目標を携えていることで、積極性の高い交流が生み出されていた。このようなアーティストの、自ら考えて主体的に行動し想像するという姿勢が、農村に住む人々や、ワークキャンプメンバーの刺激となって、行動に結びついていくプロセスが見てとれた。その結果制作された踊りは、一緒に踊った人たちの日常に、農村文化やその背景にあるものが伝わっていく可能性をひらくものとなっていることが示唆された。

またそのことで、インセンティブがどのように生まれ得るのかという点については、M-GTA を用いたインタビューやアンケートの分析から次のようなことがわかった。担い手に対して奥八女芸農プロジェクトがもたらすものは、地域の伝統や歴史を通じて文化の重要性に気づ

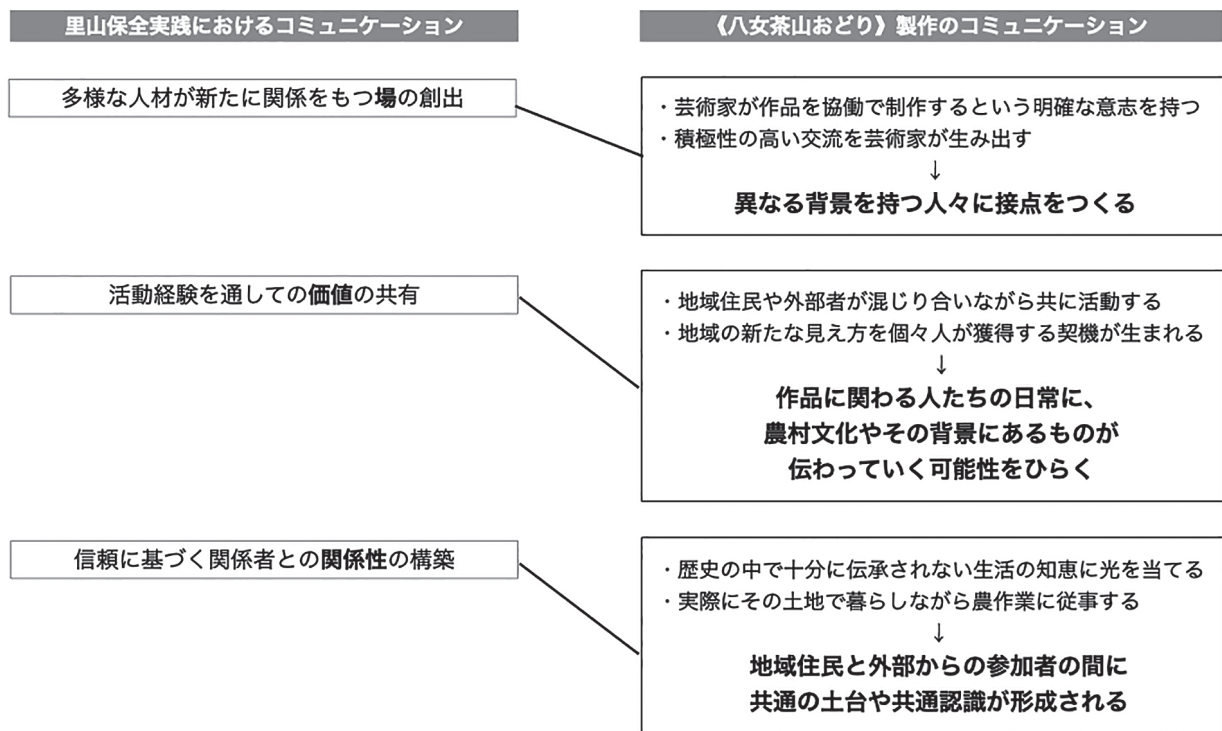


図2 里山保全実践から考える《八女茶山おどり》製作のコミュニケーション（筆者による）

き、異なる背景を持つ人々に接点をつくり、実際に身体を動かすことを通じて地域の新たな見え方を個々人が獲得することにあるということが指摘できた。そのことで、アートを通じて農村文化への学びを深めることができることが示唆された。

最後に、里地保全活動の実践における関係者間のコミュニケーションについて論じた唐崎らの議論と接合することで、プロジェクトの実践やそのインセンティブの考察からもたらされる中山間地域におけるアートプロジェクトにおけるコミュニケーションモデルについて提起する。唐崎らは、1) 活動の初期段階において、協議会にみられるような多様な人材が新たに関係をもつ場の創出、2) 活動経験を通しての里地保全活動による価値の共有、3) 信頼に基づく関係者との関係性の構築にどのように寄与していることの示唆という3点がコミュニケーションのポイントであると論じている。この点について今回の調査結果と照らし合わせてみる。

まず前提として、農村にアーティストが滞在し参加型であり地域の文脈を活かしたプロジェクトを行うことを通じて、地域の伝統や歴史を通じて文化の重要性に気づくことができる。その結果として図2に示すような以下のプロセスが生み出される。

1) アーティスト自身が作品を協働で制作するという明確な目標を携えていることで、積極性の高い交流が生み出される。その結果として、異なる背景を持つ人々に接点をつくることができる（多様な人材が新たに関係をもつ場の創出）。

2) 地域住民や外部者が混じり合いながら共に活動することを通じて、地域の新たな見え方を個々人が獲得する契機が生まれる。結果として生まれた作品が、一緒に踊った人たちの日常に、農村文化やその背景にあるものが伝わっていく可能性をひらくものとなる（活動経験を通しての価値の共有）。

3) アーティストが歴史の中で十分に伝承されないような生活の知恵に光を当て、実際にその土地で暮らしながら農作業に従事することで、地域住民と外部からの参加者の間に共通の土台や共通認識が形成することに寄与する（信頼に基づく関係者との関係性の構築）。

このように、多様な人材が新たに関係を持つための場を構築し、活動経験を通じてそこで生まれている多様な価値を共有し、信頼に基づく関係者との関係性の構築が行われている。それに加え、アーティストの、自ら考えて主体的に行動し想像するという姿勢が、地域内外の人々の刺激となって、次なる行動に結びついているので

ある。

本研究は事例研究であるため、今後この知見を用いて他事例を分析するための足掛かりとしたい。また民謡が本事例で用いられていることに関連し、共同体形成と民謡についての考察が梶丸¹⁶⁾により行われている。梶丸は現代における「民謡」の解明に関する研究として秋田県における民謡社会の調査を実施している。その成果として、地縁・血縁といった概念と結び付けられやすい農村部にも趣味によって結び付けられた社会的ネットワーク、すなわち「趣味の共同体」があるということ、そして民謡の「場」の重要性と多様性が示されている。ステージ上で歌うのが基本になっている現代民謡に対して、伝統的な民謡とも異なる参与型の場も存在し、衰退の一途をたどる民謡の現代的可能性が示されている。この梶丸の指摘は、農村社会で継承されている民謡が新たな共同体の形成の場として、今後の展開の可能性を示している。こうした議論についても今後本事例の研究をさらに深める際の傍線としたい。

謝辞

インタビューにご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。本事業の実施にあたっては文化庁「大学における文化芸術推進事業」の支援を受けました。本研究は、R4年度学際融合プログラム0304の支援を受けたものです。

注

- *1 このプロジェクトは二つのプログラムにより構成されており、一つは、特例認定NPO法人山村塾が長年実施している滞在型体験活動国際ワークキャンプと協働する「奥八女芸農ワークキャンプ」。もう一つは、短期合宿講座の「奥八女芸農学校」であった。
- *2 平成29年8月に開所。定員の29名に対して23名が利用登録をしており、現在の利用者はほぼ笠原地区の住民である。
- *3 インタビューでの小森耕太の発言(2022年3月24日)。
- *4 インタビューでの武田力の発言(2022年4月19日)。
- *5 インタビューでの武田力の発言(2022年4月19日)。
- *6 インタビューでの武田力の発言(2022年4月19日)。
- *7 インタビューでの佐藤良太の発言(2022年3月24日)。
- *8 インタビューでの武田力の発言(2022年4月19日)。
- *9 インタビューでの武田力の発言(2022年4月19日)。
- *10 インタビューでの佐藤良太の発言(2022年3月24日)。
- *11 インタビューでの佐藤良太の発言(2022年3月24日)。
- *12 インタビューでの小森耕太の発言(2022年3月24日)。
- *13 インタビューでの小森耕太の発言(2022年3月24日)。

- *14 インタビューでの武田力の発言(2022年4月19日)。
- *15 インタビューでの佐藤良太の発言(2022年3月24日)。
- *16 インタビューでの小森耕太の発言(2022年3月24日)。
- *17 インタビューでの小森耕太の発言(2022年3月24日)。
- *18 インタビューでの小森耕太の発言(2022年3月24日)。
- *19 インタビューでの武田力の発言(2022年4月19日)。
- *20 インタビューでの武田力の発言(2022年4月19日)。
- *21 インタビューでの小森耕太の発言(2022年3月24日)。
- *22 インタビューでの馬場美雅の発言(2022年3月24日)。
- *23 インタビューでの武田力の発言(2022年4月19日)。

参考文献

- 1) 重松 敏則, 里山林の保全・管理に対する市民の参加意欲について, 農村計画学会誌, 1990, 9 (1), pp. 6-22
- 2) 原 愛子・重松 敏則・朝廣 和夫・藤井 義久, 農山村の地域資源を活用した廃校活用プログラムの検討, 芸術工学研究, 2009, 10, pp. 57-64
- 3) 吉本 哲郎, 風に聞け、土に着け 風と土の地元学, 現代農業 5月増刊 地域から変わる日本 地元学とは何か, 農山漁村文化協会, 2001, pp. 190-255
- 4) 結城 登美雄, 地元学からの出発, 農山漁村文化協会, 2009
- 5) 大住 莊四郎, デザイン思考からみた「地元学」, 関東学院大学経済学会研究論集, 2015, 262, pp. 1-14
- 6) 唐崎 卓也・安中 誠司・木下 勇, 農業・農村体験活動関係者の参加モチベーションとインセンティブ, ランドスケープ研究, 2009, 72 (5), pp. 835-840
- 7) 熊倉 純子(監修), 菊地 拓児・長津 結一郎(企画・編集), アートプロジェクト 芸術と共創する社会, 水曜社, 2014
- 8) 西田 正憲, 過疎地域の越後妻有と瀬戸内直島における現代アートの特質に関する風景論的考察, ランドスケープ研究, 2008, 71 (5), pp. 785-790
- 9) 井原 緑, 地域振興型アートプロジェクトの要件 -土地・人・時間-, ランドスケープ研究, 2013, 77 (3), pp. 229-232
- 10) 勝村(松本) 文子・田中 鮎夢・吉川 郷主・西前 出・水野 啓・小林 慎太郎, 住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因 -大地の芸術祭 妻有トリエンナーレを事例として-, 文化経済学, 2008, 6 (1), pp. 65-77
- 11) 上田 裕文・高橋 友香, アートプロジェクトによる風景認識の変化とまちづくりへの参加意欲に関する事例研究, ランドスケープ研究, 2015, 78 (5), pp. 703-706
- 12) 佐々木 雅幸・川井田 祥子・萩原 雅也, 創造農村 過疎をクリエイティブに生きる戦略, 学芸出版社, 2014.
- 13) 田中 輝美, 関係人口の社会学 人口減少時代の地域再生, 大阪大学出版会, 2021
- 14) 唐崎 卓也・安中 誠司・木下 勇, 里地保全活動の実践における関係者間のコミュニケーションに関する課題, ランドスケープ研究, 2010, 73 (5), pp. 667-670
- 15) 岸 政彦・石岡 丈昇・丸山 里美, 質的社会調査の方法 他者の合理性の理解社会学, 有斐閣ストゥディア, 2016
- 16) 梶丸 岳, 現代における「民謡」の解明—趣味の共同体としての民謡社会(科研費)研究成果報告書, 2020, URL: <https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-17K13350/17K13350seika.pdf> (2020年4月28日更新, 2022年4月29日アクセス)